

将来を自ら切り拓いていくことができる児童・生徒の育成

～児童・生徒の自己効力感を高めるキャリア教育の推進を通して～

教職実践応用領域 学級づくり履修モデル

伊藤幹也

I 研究主題の設定

1 小中学生の言動や進路選択をめぐる現状

現在の学校を取り巻く社会問題として、「中1ギャップ」や「小1プロブレム」という言葉があるように、不登校や非行などの生徒指導上の問題行動が、常に大きな問題としてあげられる。^{注1)}

このような状況の中、筆者が勤務している学校においても、不登校生徒が増加傾向にあり、高校進学後の中途退学者も見られるという状況である。また、特に問題行動のない生徒であっても、母親に依存していたり、自分1人では行動できなかつたりと依頼心の高さや自立心のなさが目立っている。そして、中学校3年生になったときに、主体的に自分の進路をよりよく選択し、決定しようという意欲に欠ける状況がある。こうした意欲を高めていくためには、児童・生徒に対し、よりよく進路を選択、決定、適応していただくだけの資質・能力を身に付けさせる必要があると考えた。

2 将来を自ら切り拓くための資質・能力

児童・生徒がよりよく進路を選択、決定、適応していくためには、次の6つの資質・能力を身に付けさせる必要があると考えた。この資質・能力は、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書(平成16年)」の中で示された「4領域8能力」や中央教育審議会の答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」に示された「基礎的・汎用的能力」を参考に、現任校の生徒の実態に合わせて独自に考えたものである。^{資料1)}

資料1 「自ら将来を切り拓くために必要な6つの資質・能力」

- ①人間関係を築くことができる力(人間関係形成能力)
- ②自己を管理することができる力(自己管理能力)
- ③直面する問題を解決することができる力(問題解決能力)
- ④将来への展望をもつことができる資質(勤労観・職業観)
- ⑤自己を知り、自己を伸ばさせようとする資質(向上心)
- ⑥モラルの意義を理解し、守ろうとする資質(規範意識)

※「問題解決能力」と「勤労観・職業観」を合わせて「キャリア・プランニング能力」

これらの資質・能力を身に付けさせていくことで、児童・生徒は主体的によりよく進路を選択・決定し、適応することができるようになり、将来を自ら切り拓いていくことにつながるのではないかと考えた。

II 研究計画

1 基本的な考え方

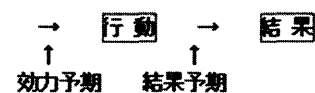
(1) 「自己効力感」について

すべての児童・生徒にバランスよく、同じように資質・能力が身に付いていくわけではない。重要なのは、それぞれの資質・能力について、「身に付いているだろう(結果予期)」とか「身に付けることができる(効力予期)」という「自己効力感」を高めることであるとする。そして、この「自己効力感」こそが、自ら将来を切り拓いていこうとする根本的な感情であるとする。

この「自己効力感」は、カナダ人心理学者 Bandura, A. (以下バンデューラ) が提唱したものである。バンデューラの「自己効力理論」によると、「自己効力感」とは「ある具体的な状況において適切な行動を成し遂げられるという予期、および確信の感情」のことであり、「結果予期」と「効力予期」の2つに区分される。^{資料2)}そして、「自己効力感」を通して、人は自分の感情、考え、行為をコントロールしている。つまり「自己効力感」とは、人間がたくましく生きていくための根本的な感情であるとされている。^{注2)}

また、バンデューラは、この「自己効力感」を育むために、次の4つの方法があると述べている。^{資料3)}

資料2 「Bandura, A.の自己効力理論」



資料3 「自己効力感を高める方法と具体的な方策」

- 達成体験**：児童・生徒に上手くできた経験をさせること
- 代理体験**：よいモデルを示すこと
- 言語的説得**：言葉によって励ますこと
- 情動的喚起**：学級全体が適度な緊張と開放的な雰囲気になりあふれていること

注3) 三村隆男 著『キャリア教育入門』より

1つ目は、自分自身が何かを成功したり、達成したりした経験「達成体験」。2つ目が、自分以外の他人が何かを成功したり、達成したりした経験「代理体験」。3つ目が、自分に能力があることを言語的に説明されること、言語的な励ましである「言語的説得」である。そして最後の4つ目は、「情動的喚起」である。「自己効力感」は、ストレスや緊張感など、自分の状態に影響

響を受けると述べている。

この「自己効力感」を育むことの重要性が高まってきたのは、子どもたちの遊びの形態が変化し、「小集団」あるいは「個」で遊ぶようになってきたり、テレビゲームなどのバーチャルな遊びが中心となったりしていることや、家庭の状況が変化し、核家族や「鍵っ子」と呼ばれる子どもたちが多く見られるように家族で過ごす時間が減ったことが原因である。これまで「自己効力感」を育ててきた大切な機会が奪われてしまったのである。

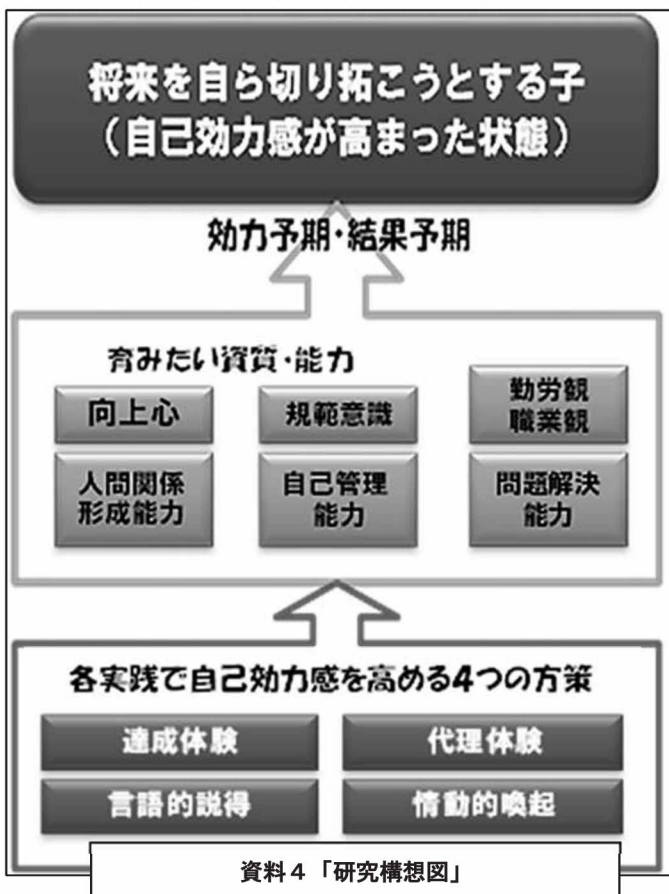
また同時に、児童・生徒を取り巻く社会環境の変化がとてつもなく激しく、多様な価値観の存在する中で、自ら判断し、行動するための力として、「自己効力感」が必要になっていると言える。

(2) キャリア教育との関わりについて

本研究実践は、児童・生徒の「自己効力感」を高めることで、健全なキャリア発達を促すことを目指している。実践では、学校教育活動を通して、「達成体験」「代理体験」「言語的説得」「情動的喚起」の4つの方策を児童・生徒に与えていくことで、前術の6つの資質・能力を高めていくものである。各実践では、4つの何れかの方策によって資質・能力を高めることができる。その結果、将来を自ら切り拓こうとする「自己効力感」が高まった状態の児童・生徒に近づかせ、健全なキャリア発達を促していこうとするものである。

2 研究の構想

研究の流れは、下の図(資料4)のように考えている。



資料4「研究構想図」

3 研究の進め方

(1) 研究仮説

目指す児童・生徒像に迫るため、次のような研究の仮説を設定した。

仮説①

校内のキャリア教育を推進するコーディネーター役を置き系統的・効率的なキャリア教育を推進すれば、職員のキャリア教育に対する理解は深まり、共通理解のもと実践を進めていくことができるであろう。

仮説②

児童・生徒の実態を把握し、コーディネーターによる系統的・効率的なカリキュラム編成や教材の開発を進めていけば、児童生徒の「自己効力感」は高まり、自ら将来を切り拓いていく力を身に付けることができるであろう。

(2) 研究の手だて及び検証方法

研究の仮説を検証するため、本研究の具体的な手立てとその検証方法を次のように考えた。

【手立て①】

校内のキャリア教育推進のコーディネーター役を置くことで、職員のキャリア教育への理解を深める。

【検証方法】

教職員アンケートを実施し、教職員の理解やキャリア教育を推進する上での成果や課題を把握し、自らのコーディネート力を検証する。

【手立て②】

コーディネーターを中心に小1～中3まで、身に付けさせたい資質・能力を系統立ててカリキュラムを編成することで、効率よく効果的に資質・能力を育む。

【検証方法】

抽出児童・生徒を設定し、その記録や作品を分析することで、手立ての有効性について検証する。

【手立て③】

手立て①②を実践することによって「自己効力感」が高まり、児童生徒に自ら将来を切り開いていくことができる資質・能力を身に付けさせる。

【検証方法】

事前と事後に「自己効力感」に関するアンケート調査を実施し、手立ての有効性について検証する。

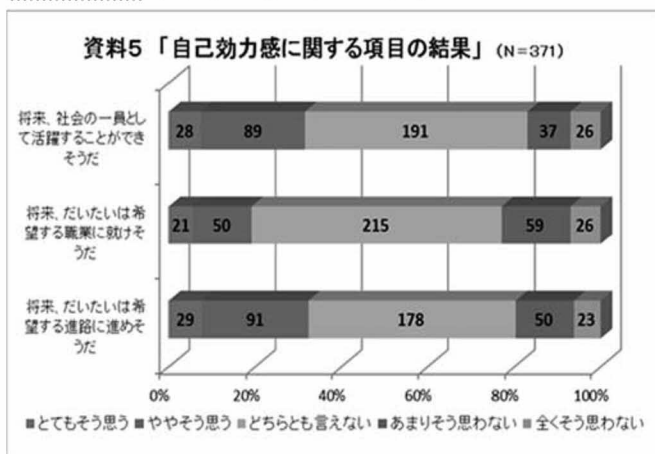
III 研究の内容

1 実態調査

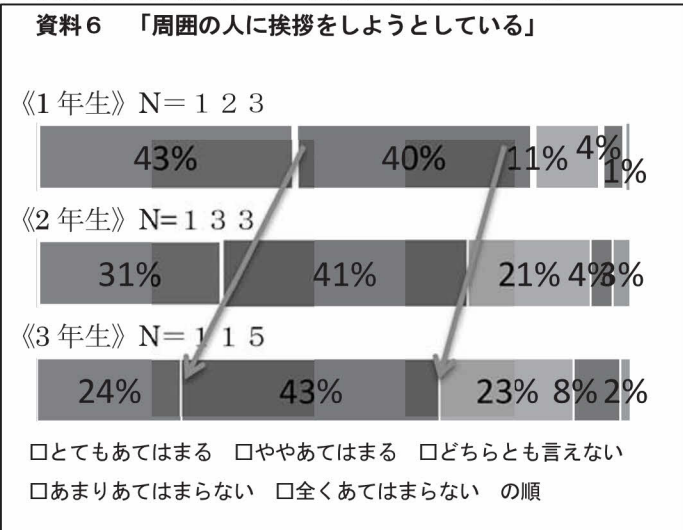
平成24年1月12日に平和中学校371名を対象にアンケート調査を実施した。アンケートの項目については、愛知県義務教育問題研究協議会専門部会や国立教育政策研究所が示している資質・能力の系統表を参考に独自に本校生徒に身に付けさせたい資質・能力の系統表を作成し、それをもとにアンケート項目

を決定した。

その結果によると、「自己効力感」が「高い」と考えられる生徒が30%に満たないことがわかった。逆に「自己効力感」が「低い」と考えられている生徒は20%程度であることがわかった。資料5)



また、各学年ごとの結果を比較すると、学年を追うごとに「自己効力感」が低くなっていくこと(45項目中29項目で低下)がわかった。資料6) わかりやすく一例をあげると資料6のように低下している。



そして、「自己効力感」がどの学年も低い項目もあることがわかった。特に、「問題解決能力」に関する項目、「人間関係形成能力」に関する項目、「勤労観・職業観」に関する項目で「自己効力感」が低いことがわかった。

これらのアンケート結果から、健全なキャリア発達を促せるように、「問題解決能力」「人間関係形成能力」「職業観・勤労観」の育成に重点を置いて「自己効力感」を高めていくためのカリキュラムを編成する必要があると考えた。

IV 研究の実際

1 カリキュラムの編成

(1) カリキュラム編成の重点

生徒の実態を踏まえ、「人間関係形成能力」「問題解決能力」「勤労観・職業観」における「自己効

力感」を高めることを重点にカリキュラムを作成していく。また、どの場面でのどの資質・能力を育てたいかを明確にしておくことで、実践者が混乱せず、重点的に指導していくことができると考えた。資料7)

資料7 「重点的に育てたい資質・能力と指導場面」

場面	特に育てたい資質・能力	「自己効力感」を育てるための中心となる実践方法
特別活動 (学活、行事、生徒会活動)	「向上心」 「自己管理能力」 「人間関係形成能力」 「勤労観・職業観」	代理体験 言語的説得
総合的な学習の時間	「問題解決能力」 「勤労観・職業観」	達成体験 言語的説得
道徳	「向上心」 「規範意識」 「勤労観・職業観」	代理体験 言語的説得
各教科	「人間関係形成能力」 「問題解決能力」	達成体験 代理体験 言語的説得
課外活動	「向上心」 「人間関係形成能力」	達成体験 言語的説得

(2) 中学校3年生のカリキュラム

編成したカリキュラムを中学校3年生を例にして示すと次のようになる。

① 中学校3年生での目指す生徒の姿 資料8)

【人間関係形成能力】	資料8 「めざす生徒の姿」
【自己管理能力】	目的や時と場合に応じて、誰とでも協力しようとする生徒
【問題解決能力】	最後まで前向きに困難を乗り越えようとする生徒
【勤労観・職業観】	様々な情報をもとに、自分の進路を選択しようとする生徒
【向上心】	社会の仕組みを理解し、社会の一員として活躍しようとする生徒
【規範意識】	目標に向けて自分を高めようとする生徒
	社会のきまりやマナーの意義を理解し、他者の権利を尊重しようとする生徒

② 中学校3年生で育てたい資質・能力とカリキュラム 資料9)

資料9 「カリキュラム」 ※太線枠内が今年度の重点指導目標

月	時	場面	学習内容	人間関係形成	自己管理	問題解決	勤労観・職業観	向上心	規範意識
4月	1時	学活	構成的グループエンカウンター①	○	○	○	○	○	○
4月	1時	学活	進路選択の手順を知ろう	○	○	○	○	○	○
5月	2時	総合	理想の生き方について考えよう(探究活動)	○	○	○	○	○	○
6月	18時	総合	理想の生き方について考えよう(修学旅行)	○	○	○	○	○	○
6月	1時	総合	理想の生き方について考えよう(職業観研修)	○	○	○	○	○	○
6月	19時	学活	受験に向けての心得を知ろう(マナー講座)	○	○	○	○	○	○
7月	4時	学活	教育相談	○	○	○	○	○	○
7月	1時	生徒会	選手走行会	○	○	○	○	○	○
7月	6時	総合	理想の生き方について考えよう(身近な人の生き方調べ)	○	○	○	○	○	○
7月	1時	課外	部活動：夏季大会	○	○	○	○	○	○
8月	1時	課外	体験入学：自分に合った進路選択をしよう	○	○	○	○	○	○
9月	1時	学活	構成的グループエンカウンター②	○	○	○	○	○	○
9月	12時	行事	学校祭	○	○	○	○	○	○
10月	6時	行事	遠足	○	○	○	○	○	○
11月	2時	総合	理想の生き方について考えよう(発表会)	○	○	○	○	○	○
12月	1時	学活	自分に合った進路選択をしよう	○	○	○	○	○	○
12月	4時	学活	教育相談(進路相談)	○	○	○	○	○	○
1月	1時	学活	構成的グループエンカウンター③	○	○	○	○	○	○
2月	1時	学活	教育相談(進路相談)	○	○	○	○	○	○

2 コーディネーターとしての役割と動き

(1) 校務分掌とキャリア教育担当の位置づけ

各学校でキャリア教育を推進していく上で、コーディネーターの立場をどのように位置付けるかが重要である。そこで、前年度に本研究の内容を伝え、理解を得た上で、校務分掌を配慮してもらった。そして、今年度は、生徒指導、進路指導、総合的な学習の時間等に関わる立場になった。特に進路指導の中で、進路指導の担当とキャリア教育の担当の役割分担を明確にした。資料10)

資料10「校務分掌での位置づけ」

- 総合的な学習の時間…平松、伊藤、飯田、永井
- 生徒指導 G (伊藤、麦島、木村、塚本)
 - 生徒指導…伊藤、麦島、木村、塚本
 - 教育相談…伊藤、竹市 (養教)、藤堂 (SC)
 - 通学指導…木村、塚本
- キャリア教育 (進路指導) …藤田、伊藤、森、釣谷
 - キャリア教育 (全体計画) …伊藤
 - 進路指導 (進学指導) …藤田、森、釣谷
- 現職教育…木村、教務、伊藤、吉川、麦島

(2) 職員会議への提案

校務分掌を受けて、年度当初のキャリア教育全体計画を職員会議で提案した。まずキャリア教育とは何かという定義を示し、ガイダンス機能について職員で共通理解を図った。それから、「本年度のキャリア教育の目標、各学年で身に付けさせたい資質・能力(人間関係形成能力、自己管理能力、問題解決能力、勤労観・職業観、向上心、規範意識)と指導計画を示し、全職員での共通理解の下で実践が進めていけるようにしたい」と基本方針を示した。

職員会議という短い時間ですべてを共通理解することは難しく、今後、行事ごとにキャリア教育の視点を意識してもらうよう各学年、各行事の担当者に積極的にコーディネーターが関わっていくことにした。

(3) 総合的な学習の時間との関連

本年度、本校の「総合的な学習の時間」では、「生き方」を考えるとということを中心に進める計画が立てられた。キャリア教育と関連する部分がとても大きい活動である。そこで、まず各学年に年間の計画を作成してもらった。各学年ごとにどのようなテーマで、何を追究し、キャリア教育の視点でどのような力を身に付けさせたいのか、またどの場面で評価するのかを明らかにしていった。

(4) 進路学習(学活)計画との関連 資料11)

進路学習の計画は、効率よく学習を進めていけるように、総合的な学習の時間で行う内容と重複する部分を削除して、進路学習の指導計画を立てた。

(5) 道徳の時間との関連

道徳の時間についても、キャリア教育と深くかかわりのある主題について、各学年の年間計画を示した。資料12)

学級活動(学業と進路)年間指導計画		【第1学年】	
月時	主題	内容	実学的体験活動等
4月	1 3	いま、わたしたちが学ぶこと 中学校の学習と生活について理解を深め、これからの学習と生活に目標を持ち、意欲的に臨む姿勢をつくる。 中学生活と進路P.4～5	入学式 若狭宿泊学習
5月	2 3	学級の組織と自分の役割 係や組織の必要性とその活動について主体的に考え、積極的に取り組む意欲を持つ。 中学生活と進路P.6～7	生徒総会 (若狭宿泊学習) 委員会活動
6月	3 3	将来の自分を考えよう 【マナー講座】 講師を招き、「夢や希望を大切にしよう」という内容の講話を聞くことで、これまでの学習内容を確かめようとする。	

資料11「キャリア教育年間指導計画(学活)」

キャリア教育に関連する道徳の授業
「人としてよりよく生きること」を追求するキャリア教育は、道徳指導との関わりが密接になります。それは、道徳指導が、生徒の考え方や判断力を高め、心情を豊かにし、人間としての生き方についての自覚を深め、「人間としていかに生きるべきか」を追求しているからです。社会性と自立心を身に付け、豊かに生きていく力を養うために、特に以下に示す道徳の内容項目との関連を図っていききたいと思います。キャリア教育と関連づけて授業を行ってください。
()は関連があり、実践することが望ましいもの

月	第1学年	第2学年	第3学年
4月	ぼくの仕事は便所そうじ 【4-(B)社会奉仕】	〔七宝の里〕 【4-(B)郷土愛】	
5月			明かりの下の燭台 【4-(I)集団生活の向上】
6月	鉄の人 【1-(2)目標の実現】	愛されるデンさん 【4-(5)社会奉仕】	加山さんの願い 【4-(5)社会奉仕】

資料12「キャリア教育指導計画(道徳の時間)」

(6) 現職教育との関連

本年度の現職教育では、「言語活動の充実」をテーマに研究が計画された。キャリア教育の視点として、「人間関係形成能力」や「問題解決能力」を高めることにつながる。そこで、研究授業を進める上で、授業者と参加者に、キャリア発達に関しても意識した実践を依頼した。

(7) 教育相談との関連

教育相談では、教育相談の意義やアンケート項目から見直し、キャリア発達を確認したり、促したりする機会にできるように職員会議で教育相談の基本方針を提案した。資料13)

定期相談アンケート (1年生)

(1学期) _____年 組 番 氏名 _____

このアンケートは、定期相談でみなさんと話し合う時に使います。日頃から悩んでいること、気になっていることなどについて知り、少しでもみなさんが楽しい中学生活のようにしていきたいと思っています。答え方は、各質問に対する自分の気持ちと同じもののみ、そのことについての内容を書ける範囲で書いてください。相談に役立てていきます。

1 人間関係に関する **と【人間関係形成能力】**

(1)学級で	(2)部活動で	(3)その他の活動で
大塚君から 少し気になった あまり気にならな ない 4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1

(4)その他に気になっていること(自分以外も含めて)

※自分の意見を適切に伝える、人の意見を尊重しようとする生徒(キャリア目標)

このことで教育相談を担当する担任の先生方にキャリア教育の視点で実践してもらえるようにした。

3 中学校1年生「総合的な学習の時間（若狭宿泊学習）」の実践

第1学年の4月に行われた若狭宿泊学習では、キャリア教育の目標を意識して、次の目標を設定して2泊3日の活動を行った。1つ目の目標が、中学校という集団生活を過ごしていくためのルールやマナーの意義を知り、実行できるようにさせること（規範意識）、2つ目の目標が人間関係の大切さを理解し、互いに協力する気持ちを育てること（人間関係形成能力）、3つ目の目標が、将来の夢や希望を考え、そのために中学校で何を頑張るか目標をもたせること（勤労観・職業観）である。

資料14 「朝の集いのようす」

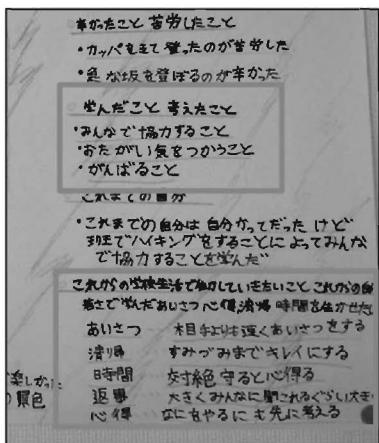


出発式、発志式、朝の集いなどを通して、「あいさつ、時間、返事、清掃、心得」の「5つの実行」と呼ばれる平和中学校のルールを理解させて、行動させた。

自然体験活動の1つとして行った「カッター漕艇」では、クラスで協力してやり遂げる達成感を味わうことができた。

生徒の振り返りの作品を見ると、みんなで協力すること、お互いに気を使うことなどの「人間関係形成能力」を身に付けたいという記述や、平和中学校の5つの実行を理解し、身に付けたいという記述がほとんどであった。

資料15 「若狭宿泊学習のまとめ」

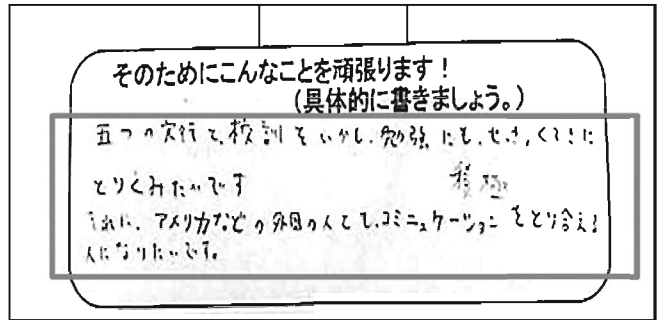


最終日の夜には、「発志式」を行い、これからの中学校生活で頑張りたいことを誓い合い、自らの将来を考える良い機会にすることができた。天候に恵まれず、予定していたすべての活動を行うことはできなかったが、帰着式での生徒の様子を見ると、話を聞く姿勢が良くなっていたり、大きな返事ができたりするなど、3日間の活動を通して、大きな変化が見られた。

資料は、将来の夢に向かって、学校生活での目標をもつことができた生徒の文章である。若狭宿泊学習を通して、「5つの実行」という学校生活でのルールやマナーを守ることが将来の夢の実現につながるという見通しをもつことができていることがわかっており、自己効力感が高まっていることがわかる。

資料16

資料16 「発志式で誓った内容」



4 中学校2年生「総合的な学習の時間」の実践 (1) 商工会講話での実践

2年生の総合的な学習の時間では、「働くことと向かい合ってみよう」というテーマで、職場体験学習を中心とした探究活動を行っていった。キャリア教育の目標としては、1点目が、働くことの喜びや苦勞、厳しさ、意義を体験から学び、将来の自分自身の進路選択に活かすということ（勤労観・職業観）、2点目が、社会人として必要なあいさつや礼儀などを身に付けること（人間関係形成能力）である。

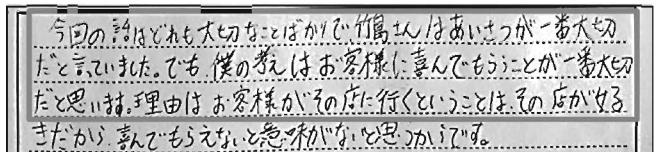
7月に商工会を代表して、ヨシヅヤ平和店の店長に、体験にあたっての心構えや実習態度について、お話をしていただいた。

資料17



資料17 「商工会講話の様子」

資料18 「講話後の振り返り」



このことで職場体験での目標の1つである社会人として必要なあいさつや礼儀など（人間関係形成能力）を意識させることができた。

(2) 職場体験学習の実践

8月下旬の3日間には、それぞれの事業所に別れ、職場体験学習に臨んだ。

資料19 あいさつや礼儀などを実践すること（人間関係形成能力）を学ぶとともに、課題をもって職場体験に臨ませた。事後の生徒の振り返りのレポートを見ると、挨拶の大切さや将来の職業選択に際しての心構えを学ぶことができた。今回の実践の目標が達成されていることがわかる。



資料19 「職場体験の様子」

資料20

資料20「振り返りのレポート①」

【学校や家庭生活への課題】
 職場で血洗いをたくしや、たのしみ、家でも手伝いたいと思います。あと、職場の人が、どんな時でもあいさつが大切だと言っていたので、高校入試の面接などで心がけたいです。
 【進路選択や将来への考え】
 私は接客業をしたいと思、ていたけど、食品の調理をして楽しかったです。どんな職業に就くか分からないけれども、どんな時でも全力でがんばりたいと思います。

また、自分に合った進路選択がとても重要だということ、職場体験学習を通して学ぶことができたことがわかる。資料20)

資料21「振り返りのレポート②」

ほんと、これからの生活に役立っている。
 【進路選択や将来への考え】
 来、社会生活に役立つことを、自分のために進路選択や職業選択が大切だと思、た。今、持参の冊子が、自分の進路もよく知、り、これからの、自分の将来のこと、を、しっかりと見、つ、これからの、進路を見、つ、出来るようにしたい。

(3) 職場体験発表会の実践

11月には、職場体験学習の発表会を行った。「働くことと向かい合ってみよう」というテーマで追究してきたことを発表させた。キャリア教育の目標としては、「勤労観・職業観」に加え、情報を集め、整理し、伝えるといった「問題解決能力」を身に付けることである。

発表会後には、これまでに調べてきた活動を振り返り、問題解決能力が身に付いたかどうかを自己評価させた。

5 中学校3年生「総合的な学習の時間」の実践

(1) 「生き方調べ」の実践 (4月)

第3学年の総合的な学習の時間は、自らの「理想の生き方」について考えていくことを目標に行った。身近な人、尊敬する人、行事などを通して出会った人に対して、「生き方」という視点でとらえ直させ、自らの理想の生き方をまとめさせた。

(2) 修学旅行の実践 (6月)

修学旅行では、よりよく生きることを意味を考、えさせる「勤労観・職業観」や、誰とでも協力しようという「人間関係形成能力」を高めることを目標に実践を進めた。

「ディズニーアカデミー」では、ホスピタリティの考え方について学んだ。そこでは、実際にディズニールランド内で働くキャストに対してインタビューしていた。また、自然体験学習でのインストラクターやペンションのオーナーに対しても同様にインタビューをしていった。このことで、出会った人々がどんな考えで仕事をしているのかを調べていくことができた。資料22)

また、もう一つの目標である「人間関係形成能力」については、バーベキューや班別行動、ペンションで

部屋ごとに分かれて過ごす中で、親しい仲間やそうでない仲間とも協力し合う経験を積ませた。資料23)

これらの実践について修学旅行後に、次のような振り返りを行っている。



資料22「キャストにインタビューする生徒」



資料23「バーベキューをしている生徒」

資料24

「生徒Aの振り返り (女子・成績中位・障害をもっている)」

修学旅行に行く前は、「ホスピタリティに、自由に」が理想の生き方。でも、修学旅行を通して、たくさんのことを学び、いろいろなことを経験し、思いがけず、ホスピタリティに自由に生きていきたいと改めて思、っています。

自分らしさを意識して将来の生き方を考えたいと再認識していることがわかる。資料24)

資料25「生徒Bの振り返り (女子・成績中位・社交的な性格)」

この修学旅行を終えて考えた私の「生き方」は、やっぱり、夢を持ち続け、笑顔で、それ以外の人も笑顔にできるような生き方が理想です。

他の人を笑顔にできるような生き方をしたいというように考え方が加わっている。資料25)

資料26「生徒Cの振り返り (男子・成績下位・精神的に不安定)」

最も心に響いたインタビューは、ドリームキャッチャー作りのインストラクターの、おもしろいインタビュー。おもしろいのは、この仕事は自分に、って書いてたと言っていました。僕は仕事が、喜、び、た、たら、人生が最高なんじゃないかと思、っていました。自分の仕事を僕も楽しめた。

修学旅行で出会ったインストラクターの話を聞いて、働くことの魅力に気付き、将来の自分の生き方について考、えている。資料26)

このように自らの将来の生き方に触れていることから、3名ともに「勤労観・職業観」における自己効力感の高まりが見られた。振り返りの記録にはないが、「人間関係形成能力」についても、グループ内のメンバーで気を遣い合ったり、インタビューを通して言葉遣いに気を付けたりする姿が見られた。

(3) 「理想の生き方を調べよう」の実践 (7~11月)

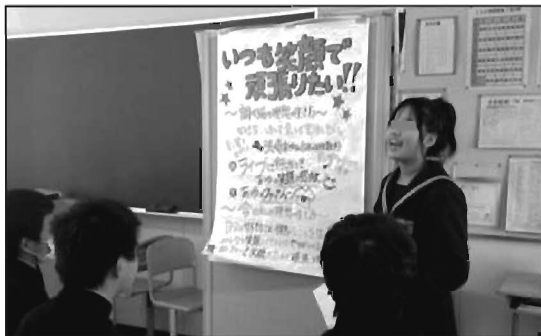
自分の身近な人物の生き方や尊敬する人物

の生き方について調べさせ、それをもとに自らの理想の生き方について考え「勤労観・職業観」を育む取り組みを行った。

まず、7月から夏休みには、自分が尊敬している、憧れている身近な人や有名人を調べさせた。「問題解決能力」の中の自らの課題を設定し、どのように調べか計画を立てたり、インタビューしたりする力を高めることを目標に活動をさせた。

9月から10月には、必要な情報を選択し、活用する力を高めることを目標に、自らの理想の生き方というテーマで、模造紙に構造化させた。

11月は、公開日を利用した総合的な学習の時間の発表会に向けての準備に取り組んだ。ここでは、「人間関係形成能力」として、時と場に応じた適切な言葉遣いをする力や、自らの考えを適切に伝える力を高めることを目標にした。



資料27「ポスターセッションで発表する生徒」

11月10日の発表会当日では、ポスターセッションの形式で発表を行った。資料27) 参観者の質問に答えたり、相槌などの反応を求めたりと、双方向のコミュニケーションができるように意識させ、原稿の棒読みにならないようにさせた。

以下は、発表会後の生徒の振り返りの様子である。レーダーチャート式の自己評価と記述式の振り返りを行った。

資料28「生徒Aの振り返り」

理想の生き方調べの活動を通して成長できたこと・他の人の発表から学んだこと

私は、生き方調べを通して、自分の生き方が変わりました。

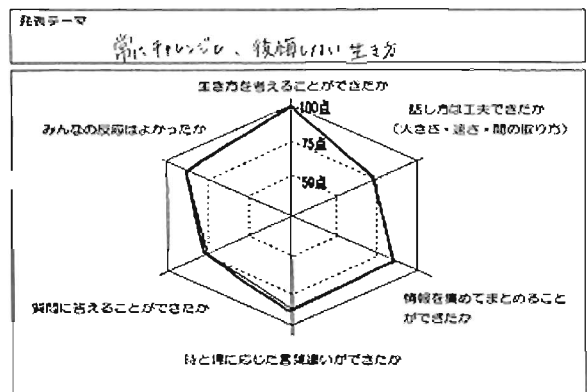
生き方調べで、1人1人が私にとって憧れの存在になり、私に、両親も前よりも尊敬するようになりました。前まで常に生き方にもあり、深く考えることがなかったのが、今回、生き方について深く考え、自分の本当の生き方を知ることができました。私に、他の人の発表を聞いて、自分や周りの人はそれぞれだと改めて強く感じました。みんなスゴイの仕方ばかりのスゴイの仕方が勉強になりました。すごく良かったです。

生徒Aは、障害を抱えている生徒であるが、発表内容にレーナマリアを取り上げ、将来の自分の生き方について本当に深く考えることができたことがわかる。将来はこんな生き方をしようという決意は、自己効力感がとても高い状態だと考えられる。生徒Aの発表は、級友からの評価が高く、学級の代表に選ばれ、学年全

員の前で発表した。資料28)

また、「生き方を考える」についての自己評価は、100点満点だった。このことから、勤労観・職業観に関する自己効力感が高まっている。資料29

資料29「生徒Aの自己評価」



資料30「生徒Bの振り返り」

○理想の生き方調べの活動を通して成長できたこと・他の人の発表から学んだこと

私は今回、理想の生き方調べを通して、大きく考えが変わりました。

それは、調べる前は、自由、楽しく好きなことをして生きたいと思っていたのが、調べた後は、楽しく生活できるように頑張ることに努力して、その上で、好きなこと得意なことを生かせる職業に就きたいと思うようになったことです。苦しいときでも笑顔と元気なことを大切だと改めて思いました。

それと、みんなの発表を聞いて、今、一生懸命後悔しないように生きたい、私は私も目標にしたいなあと思いました。たくさん勉強になりました。

振り返り用紙の記述を見ると、「今できることに努力して、好きなこと得意なことを生かせる職業に就きたい」と記述しているように「勤労観・職業観」が養われた様子や「向上心」の高まりが感じられる。また、「努力すれば希望する職業に就けそうだ」という効力予期を抱けていることから、自己効力感が高まったと言える。特に「生き方を考える」の自己評価は100点満点で、勤労観・職業観に対しては、強い自己効力感が抱けていることがわかった。資料30)

資料31「生徒Cの振り返り」

○理想の生き方調べの活動を通して成長できたこと・他の人の発表から学んだこと

僕は理想の生き方調べの活動を通して、より深く自分の将来について考えることができました。発表かたてを準備したり、発表の準備だけでなく、道も歩いた。強く関心をもりました。

発表の準備が早く進んでいって、その準備の練習をしました。

振り返り用紙の記述内容を見ると、友だちの生き方に強く関心をもったと記述するなど、自分の将来を考えることができ、「勤労観・職業観」を養う上で効果があったと言える。また、発表についても振り返っており、「人間関係形成能力」を高めたいという思いが感じられた。自己評価も75点と悪くない評価をしており、本実践に達成感をもてたと考えている。資料31)

6 小学校6年生「入学説明会」での実践

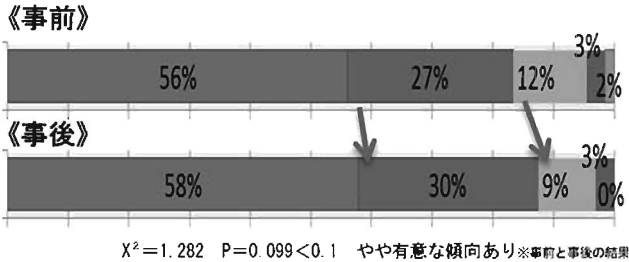
来年度入学する児童に対して、約束事の意味を理解し、守ろうとする気持ち（規範意識）を高めることと、自分の良い面を伸ばし、悪い面を改めようとする気持ち（向上心）を高めることをねらいとして、入学説明会を実施した。参加した生徒は、平和中学校の「5つの実行」に触れて、中学校入学までに「あいさつ」ができるようにしたいという気持ちをもつことができ、「規範意識」や「人間関係形成能力」が高めることができたといえる。資料32)

資料32 「小学生の作文」

思	と	こ	う	こ	給	き	平
い	大	の	の	の	の	の	か
み	ま	ら	5	時	か	中	
し	な	つ	つ	間	に	学	
た	言	の	の	の	の	校	
。	で	中	目	心	が		
あ	の	様	目				
い	あ	ほ	の	て	指		
さ	い	ま	ら	い	す		
つ	さ	ご	つ	る	こ		
と	つ	く	の	の	と		
こ	の	大	実	が	が		
れ	声	事	行	の	い		
か	が	な	ご	あ	く		
ら	ち	さ	す	い	っ		
し	い	ま	さ	が			
ア	マ	リ	っ	あ			
い	い	た	の	あ			
ま	の	と	返	え			
た	て	見	事				
い	も	い	の	特			
と	っ	ま	掃	に			

アンケートの結果でも規範意識の項目を見ると、資料33の例のように自己評価の上昇傾向が見られた。(39項目中34項目で上昇傾向) 実践は短い期間のものであったが、一定の成果が得られた。

資料33 「先生との約束を守ろうとしている」



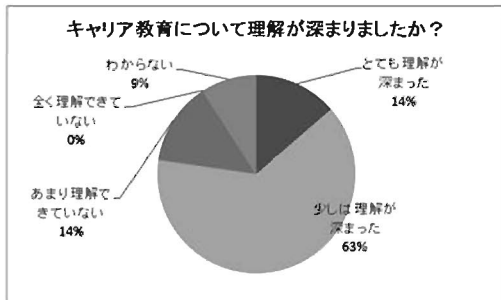
V 結果と考察

1 手立て①について

キャリア教育推進のコーディネーター役を置くことで、職員のキャリア教育への理解を深める

12月に本校の職員全員を対象にしたキャリア教育に関するアンケートを実施したところ、次のような結果であった。

資料34 「キャリア教育について理解が深まったか？」

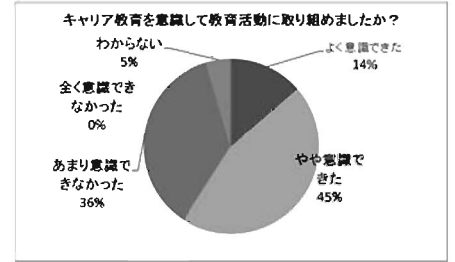


資料34を見ると、80%以上の職員が、キャリア教育に関する理解が深まったことがわかる。今回、コーディネーターを置き、キャリア教

育に本校の職員全員で取り組んできた成果だと言える。また、資料35を見ると、59%以上の職員が意識して教育活動に取り組んできたことがわかる。

資料35 「キャリア教育を意識して教育活動に取り組めたか？」

しかし、職員の40%以上が「意識できていない」あるいは、「わからない」と答えている。

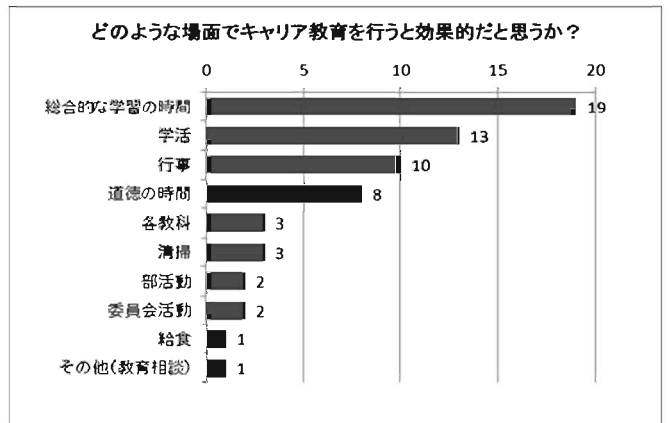


このことから、キャリア教育を理解はしていても、実際には、具体的な手立てが取れなかったり、他の観点のねらいを重視し、キャリア教育についての意識がもてなかったりという現状がアンケート結果に表れている。アンケートには以下のような意見があった。

- 広範囲になりすぎて具体的な取り組みが見えにくいので、何か1つでも具体的に全職員でめざす取り組みがあってもよかった。
- ワークシートや指導案などの共有化など、資料が不足している。
- これからの子どもにどんな力を育てるかという発想が大事。

これらの意見を踏まえるとコーディネーターとしての課題も明らかになり、次年度以降の改善点が明確になってきた。

資料36 「どのような場面でキャリア教育を行うと効果的だと思うか？」(N=20)



次に資料36に示すように、「キャリア教育が様々な教科や場面など、学校教育全体で推進していくものである」ということについては、様々な活動に意見があがったことから、職員が意識できていたことがうかがえる。特に学活よりも総合的な学習の時間を通して、生徒を育てていくと効果的であるという意見が90%以上であった。今年度のキャリア教育の取り組みが総合的な学習の時間と関連を強くさせた成果であり、多くの職員が効果的であったと実感できた結果が表れていると考えられる。

2 手立て②について

小1～中3まで、身に付けさせたい資質・能力を系統立ててカリキュラムを編成することで、効率よく効果的に資質・能力を育む

わかる。今回、コーディネーターを置き、キャリア教

抽出児童生徒の資質・能力の変容については、研究の実際の章で考察してきた通り、それぞれの実践の目標に迫るような記述や作品が見られた。

このことから身に付けさせたい資質・能力を系統立ててカリキュラムを編成してきたことによって、それぞれの学年で目指すべき生徒像を明確にして指導したことは有効であったと考えられる。

3 手立て③について

手立て①②によって「自己効力感」を高め、自ら将来を切り開いていくことができる児童・生徒を育てる

生徒の「自己効力感」に関するアンケート結果の変容を見ると、全体では変化は小さかったが、「向上心」に関する項目や「規範意識」に関する項目では上昇が見られた。逆に、「自己管理能力」や「問題解決能力」に関しては、自己評価が下がっているという結果だった。

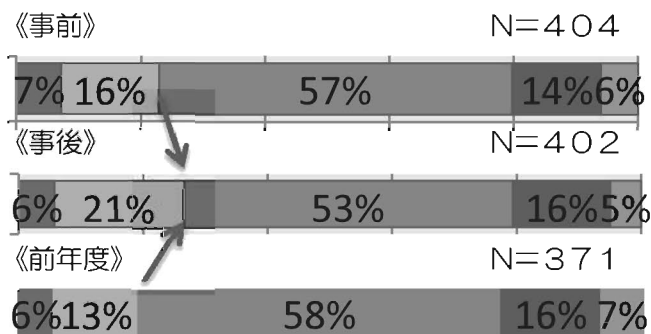
また生徒の「自己効力感」について、その変容を見ると、僅かではあるが「自己効力感」が上昇傾向にあることがわかる。前年度の結果と比較してみても「自己効力感」に関する項目は、いずれも上昇していることがわかった。(資料37)

次に資料37中の3学年間の比較を見ると、前年度に比べて、自己評価が高くなっていることがわかる。また、3学年の自己評価の推移に関しても、平成23年度と比べ、明らかに今年度の方が学年を追うごとに「自己効力感」が高まっていると言える。

これらの結果から、手立て①のキャリア教育推進のコーディネーター役を置く務ことで、職員のキャリア教育への理解を深めたことや手立て②の小1～中3まで、身に付けさせたい資質・能力を系統立ててカリキュラムを編成することで、効率よく効果的に資質・能力を育む実践によって「自己効力感」が高まったと考えられる。

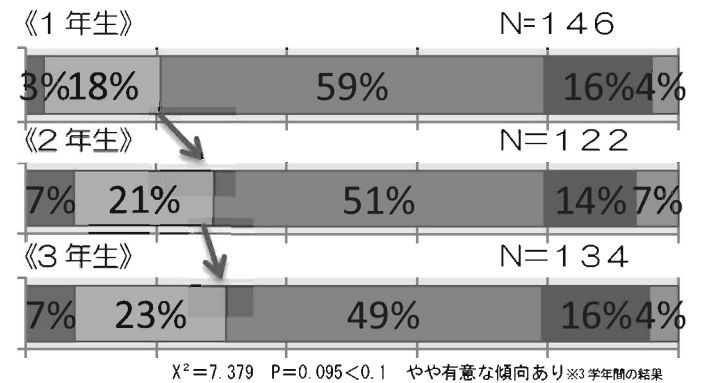
資料37 「自己効力感の変容」

将来、だいたい希望する職業に就けそうだ。(全体)



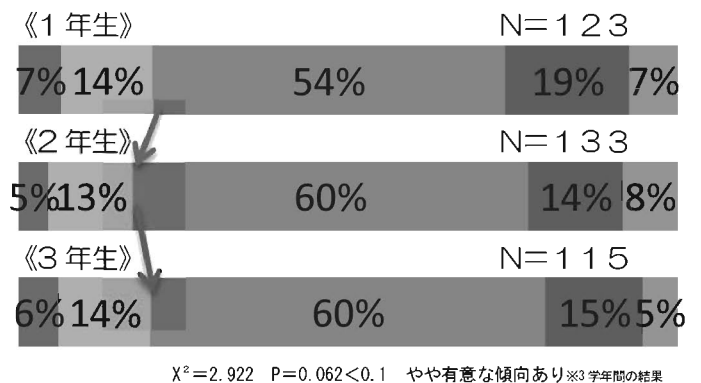
$\chi^2 = 4.860$ $P = 0.077 < 0.1$ やや有意な傾向あり※事前と事後の結果

将来、だいたい希望する職業に就けそうだ。(H24)



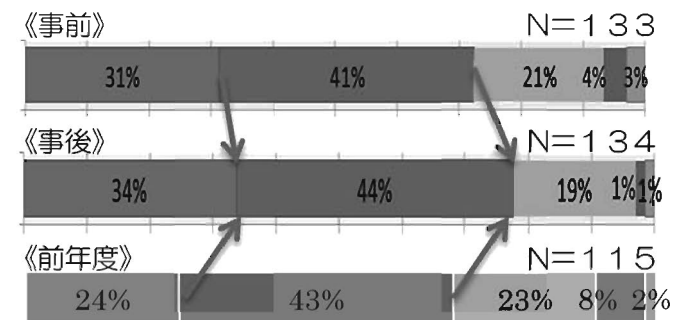
$\chi^2 = 7.379$ $P = 0.095 < 0.1$ やや有意な傾向あり※3学年間の結果

将来、だいたい希望する職業に就けそうだ。(H23)



$\chi^2 = 2.922$ $P = 0.062 < 0.1$ やや有意な傾向あり※3学年間の結果

周囲の人に挨拶をしようとしている(3年生)



$\chi^2 = 2.270$ $P = 0.092 < 0.1$ やや有意な傾向あり※事前と事後の結果

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

本研究の結果、次のような成果が見られた。

- (1) キャリア教育推進のコーディネーター役を置いたことで、職員のキャリア教育への理解を深めることができた。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力を義務教育の9年間を見通し系統立ててカリキュラムを編成したことによって、それぞれの学年で目指すべき生徒像を明確にすることができた。
- (3) 必要な3つの資質・能力に重点を置いて実践を進めてきたことで、自ら将来を切り拓くために必要な「自己効力感」を育てることができた。

2 今後の課題

次年度以降の課題として、次のような点で改善できる余地が残った。

(1) コーディネーターの改善点

- ① 生徒の実態に合わせ、どのような資質・能力をどの場面で身に付けさせるかを示し、全職員で取り組める具体的な取り組みを設定していくこと。
- ② 教職員間での理解が深まるような研修の場や共通理解を図る場を設定していくこと。

(2) 資質・能力を身に付けさせる上での改善点

- ① 義務教育の9年間の系統表について、今年度の実践をもとに目指す生徒の姿や育てたい資質・能力を見直すことで、より具体的な指導目標を設定していくこと。
- ② 次年度以降、効率よく実践を進められるように今年度、実践に使った資料や効果があったワークシートを蓄積していくこと。

(3) 「自己効力感」を高める上での改善点

- ① 教育相談などを通して、一斉指導ではできない個別の指導によって、励ましたり認めたりして、「自己効力感」を高めること。
- ② 9年間の「自己効力感」の変容を分析し、学年による「自己効力感」の特徴や変容から、どのような指導が必要かをより明確にすること。

以上のように改善点は多いが、本研究の手立てが有効であり、一定の成果が得られた。したがって研究の仮説①②によって、本研究の目指す児童・生徒である「将来を自ら切り拓いていくことができる児童・生徒」に迫ることができたと考えている。

VII 研究のまとめ

教職について10年以上になるが、学校現場では様々な原因により不適応を起し、登校できなくなってしまう生徒がいたり、進路選択の際に真剣に自分の問題として捉えることができない生徒がいたりと常に生徒への対応に問題意識をもっていた。そうした状況を改善するために、児童・生徒がよりよく進路を選択し、決定し、適応していく力を身に付けさせることはできないものかと考えてきた。そのような中で、今回の研究の中心である「キャリア教育」と「自己効力感」という2つの言葉に出会った。

今回、全校生徒と全教職員、学区の小学校の先生方にも協力を得て、今回の研究を進めたことによって、キャリア教育推進のためにコーディネーターを置くことが非常に重要であり、それが、職員のキャリア教育に対する理解を深める上で非常に有効であることが明らかになった。

また、コーディネーターを中心に、キャリア発達を

意識して実践を進めることができ、大きく生徒の「自己効力感」を高めることができた。このことからキャリア教育を推進していくことは、今日的な課題である児童・生徒を取り巻く問題の解決につながり、将来を自ら切り開く児童・生徒を育てていくことができるという確信をもつことができた。

しかしながら、今回の研究では、まだまだ課題が山積し、改善の余地が残されている。次年度以降、さらに研究を重ねることで、より効果的なキャリア教育の在り方を追究していきたいと考える。

最後に、本研究を進めるにあたり、温かいご支援をいただいた職場の先生方と2年間に渡り、熱心に指導をしてくださった教職大学院の教授陣に感謝をして、本研究のまとめとしたい。

【引用文献】

注1) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2011年 24頁、46-57頁

注2) Albert Bandura 編 本明寛・野口京子訳『激動社会の中の自己効力』金子書房 1997年 2-5頁

注3) 三村隆男 著『キャリア教育入門』美業之日本社 2004年 45-46頁

【その他の参考文献】

- ・Albert Bandura 著 原野広太郎訳『社会的学習理論』金子書房 1979年
- ・Albert Bandura 編 原野広太郎・福島脩美 共訳『モデリングの心理学』金子書房 1975年
- ・Albert Bandura 著 原野広太郎・福島脩美 共訳『人間行動の形成と自己制御』金子書房 1974年
- ・祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊 編『社会的学習理論の展開』金子書房 1985年
- ・TEG研究会 編『TEG活用マニュアル・事例集』金子書房 1991年
- ・東京大学医学部心療内科TEG研究会 編『新版TEG解説とエゴグラム・パターン』金子書房 2002年
- ・東京大学医学部心療内科TEG研究会 編『新版エゴグラム・パターン』金子書房 1995年
- ・山本眞理子 編『心理測定尺度集Ⅰ』サイエンス社 2001年
- ・吉田富二雄 編『心理測定尺度集Ⅱ』サイエンス社 2001年
- ・松井 豊 編『心理測定尺度集Ⅲ』サイエンス社 2007年
- ・櫻井 茂・松井 豊 編『心理測定尺度集Ⅳ』サイエンス社 2007年
- ・吉田富二雄・宮本聡介 編『心理測定尺度集Ⅴ』サイエンス社 2011年
- ・松井 豊・宮本聡介 編『心理測定尺度集Ⅵ』サイエンス社 2011年
- ・ひらたつまびらか・鶴田麻也美 著『小学校 キャリア教育と授業プログラム』日本標準 2006年
- ・京都大学附属京都小学校・中学校 編『これならできる「キャリア教育」』明治図書 2006年
- ・松井賢二編『中学校3年間のキャリア教育・進路指導』東洋館出版社 2007年
- ・一般社団法人「教育コーディネーター協議会」著『「教育コーディネーター」新たな教育作りの仕掛け人』朝日新聞出版 2011年
- ・飯盛義徳・横尾敏史 著『小学生のためのキャリア教育実践マニュアル』慶應義塾大学出版会 2011年
- ・荒木秀一 著『COMPACT64 ソーシャルスキル早わかり』小学館 2011年
- ・桑原恵一・島田光美 編『中職担任がしなければならない学級づくりの仕事12か月1〜3年』明治図書 2011年
- ・吉澤克彦 編『生徒指導提要対応 エゴグラム・エゴテスト12か月 中学校』明治図書 2011年
- ・愛知県中学校産業教育研究協議会 編著『愛知県中学生生活と進路第1-3学年』美業之日本社 2011年
- ・東京教育研究所 編『生きる力を高める授業を求めて～子どもは学び、教師は伸びる～』東京書籍株式会社 2009年
- ・愛知県稲沢市立平和中学校 編『社会の一員として自己を生かすことができる生徒の育成』1994年
- ・岩佐英彦・宿久洋著『アンケート調査・分析ができる本』秀和システム 2009年
- ・『中学校キャリア教育の手引き』文部科学省 2011年
- ・『小学校キャリア教育の手引き』文部科学省 2010年